

おたふくかぜワクチン予防接種をご希望の方へ

(必ず、予防接種を受ける前にお読みください)

■おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）について

ムンプスウイルスによって起こる感染症です。感染者の咳やくしゃみにより空気中のウイルスを吸い込むことなどにより感染が起こります。潜伏期間は2～3週間で、発症数日前から症状がなくなるまで、他者に感染させる可能性があります。

主な症状は、発熱、唾液腺（特に耳下腺）の腫れ・痛みです。主な合併症として、無菌性髄膜炎があり、罹患者の1～10%が併発すると言われています。また、頻度は少ないものの、脳炎や脳炎、思春期以降の男性では精巣炎、女性では卵巣炎を合併することもあります。その他、「ムンプス難聴」と呼ばれる急性の感音性難聴が起きることもあり、完全に聴力が回復することは難しいとされています。

■おたふくかぜワクチンの効果

ムンプスウイルスを弱毒化した生ワクチンです。接種後約2週間でおたふくかぜに対する免疫がつくと言われています。1歳から接種できます。ワクチンを接種すると、約90%（1回接種後）に免疫ができます。日本小児科学会は、予防効果の面で2回接種を推奨しています。接種後におたふくかぜに罹患した場合は、接種を受けていなかった場合に比べると合併症などの頻度も少なく、症状は軽度になると言われています。

■おたふくかぜワクチンの副反応

注射部位の症状（赤み、はれ）、発熱や軽度の耳下腺のはれ（約1%）、発疹、じんましん、かゆみを認めることができます。これらは通常、数日で消失します。

また、まれに、ショック、アナフィラキシー様症状、無菌性髄膜炎、急性血小板減少性紫斑病、難聴、精巣炎の報告があります。髄膜炎については、3歳未満での接種により頻度が下がるとも報告されています。

接種を受ける前に

■一般的注意

予防接種は、体調のよいときに受けるのが原則です。保護者の方は、おたふくかぜの予防接種について、この説明書をよく読み、効果や副反応についてよく理解しましょう。

気にかかることや分からないことは、接種を受ける前に担当の医師に質問しましょう。説明に同意したうえで、予防接種を受けるかどうか判断してください。

裏面もお読みください

■予防接種を受ける事ができない人

- ①明らかに発熱のある人（37.5℃以上の場合）
- ②重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
- ③おたふくかぜワクチンに含まれる成分により、アナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起したことがあることが明らかな人
- ④免疫機能の疾患の診断を受けた人、または免疫機能を抑える治療（副腎皮質ステロイド剤や免疫抑制剤など）を受けている人
- ⑤その他、医師が不適当な状態と判断した場合

■予防接種を受けるに際し、担当医師とよく相談しなくてはならない人

- ①心臓病、じん臓病、肝臓病や血液の病気、その他慢性の病気などの人
- ②予防接種で接種後 2 日以内に発熱のみられた者及び全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を呈したことがある人
- ③過去にけいれんの既往のある人
- ④過去に免疫不全の診断がなされている人及び近親者に先天性免疫不全症の者がいる人
- ⑤本剤の成分に対してアレルギーを呈するおそれのある人

■他の予防接種との間隔について

おたふくかぜワクチンは生ワクチンのため、他種類の生ワクチンの接種から、27日以上あける必要があります。おたふくかぜワクチンを先に接種した場合も、次の生ワクチンを接種する際は27日以上あける必要があります。母子手帳は必ず持参してください。

■予防接種を受けた後の一般的注意事項

- ①予防接種を受けた後 30 分間は、急な副反応がおこることがあります。医師（医療機関）とすぐに連絡を取れるようにしておきましょう。
- ②入浴は差し支えありませんが、注射した部位を強くこすることはやめましょう。
- ③接種当日は通常の生活をしてもかまいませんが、激しい運動は避けましょう。
- ④接種後、接種部位や体調の変化があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。

■予防接種による健康被害救済制度について

おたふくかぜ予防接種は任意予防接種となります。予防接種による副反応で入院治療等が必要になったり、生活に支障ができる健康被害が発生した場合には、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法による「医薬品副作用被害救済制度」の対象となります。

※救済制度については、医薬品医療機器総合機構のホームページ等をご覧ください。

問い合わせ先：あさぎり町役場健康推進課 電話：45-7216